

よりそう

Side by Side



第86号

編集責任：延藤

編集担当者 延藤

奈良から来た京都

遠野まごころネット



橋本啓太さん(27) 自称・奈良出身

3月末に石巻市で活動し、一度家に帰ったときに読んだ朝日新聞の記事から遠野まごころネットを知り参加することを決めた。7月11日から箱崎町のガレキ班として活動をはじめ19日で帰る予定だったが、その19日にカフェ隊の手伝いを頼まれ帰宅を遅ぼしカフェ隊のリーダーとして活動を継続することになった。

本来は被災者間のコミュニティをサポートするために活動するカフェ隊は、その性格上直接被災者と触れ合う機会が多く、やりとりの中でいま困っていることを聞くことが多い。自分たちがあいだに立ってそれをガレキ班におろすのはどうだろう、ということから新たなニーズの受け入れのアイデアが膨らんだ。これによって被災者個人から直接依頼を受けることができる。それはやがて形となる。

しかし本来のカフェ活動に加えてさらにニーズ調査という大きな負担を強いられ、またそれを継ぐ者がいないという苦境がおとずれる。単独で続ける難しさ、また「自分が抜けたら隊が終わる」という重圧に押しつぶされそうになったこともある。カフェ活動についても、地元の要望ではじまったものではないため自己満足やお節介ではないのかと葛藤したときもあったという。それでも続けていくうちに、地元の人々のこちらに対する反応が少しずつ変わっていくことに気づく。ところどころで感謝の声を聞くようになった。

「箱崎に関しては」と彼は留保を付ける。「カフェ隊は被災者間の交流としての役割ではなく、ボランティアと被災者の

窓口になるような活動を担うのが一番有効だと思います」
ニーズを取る係を専門化させるという試みは今まで何度かあった。またガレキ班の中にニーズ調査の部門を設けるということもあった。とはいえ、その日かしまって「何かお困りになっていることはありますか？」と訊いてもなかなか出てこないものである。ちょっとした世間話のなかでニーズが出てくることがある。むしろそのほうが多い。それを上手く拾えるのは、やはり被災者と継続的な意思疎通を図り、関係を築いた人間でないとできないことだ。

「他の地域で上手くいっているやり方をそのまま杓子定規に当てはめては駄目。土地に合わせたやりかたを作るしかない。やはり時間がいります」。彼が中心となって築かれたやり方は、形を変えながらも今もつづけられている。橋本さんは現在の箱崎隊の作業運営を築いた功労者であり、彼なしには現体制での活動を展開することはできなかった。

現在カフェ隊は活動を一時休止しているが、後継者も決まり今後の活動に期待が寄せられている。「関係を築くには、やはり下積みと熟成期間が必要。そのためには長期ボランティアがもっと増えて欲しい」と彼は今後のカフェ隊について語った。

と、こうして書いていくととてもデキル男のように聞こえるが、普段の彼はつねにいじり回されるキャラである。みんなからは「京都(さん)」と呼ばれている。由来は元箱崎隊長・ウーガンさんへべたべたの関西弁を指して「オマエ、京都やるお？」と言われたのが始まりで、それからみんなからはことあるごとに京都と言われ、知らない人からも京都出身と思われている。

またしばらくして来られるということで、それまでゆっくり休んでください。

お知らせ

9月に入り、落とし物が大量に届けられています。各自の持ち物はしっかり管理しましょう。

天気 晴

気温 28℃
5
17℃

降水確率 0%